

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530120

研究課題名（和文） 緑風会から政権交代に見る参議院選挙の通時的分析

研究課題名（英文） House of Councillors Elections: 1947 - 2009

研究代表者

田中 善一郎（TANAKA ZENICHIROU）

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・名誉教授

研究者番号：30009823

研究成果の概要（和文）：

1947年から2009年までに実施された参議院選挙について、個々の選挙が実施された背景、各党の立候補者の数や選挙出場回数、当該選挙時の世論調査の状況と事前予測、選挙の投票率と都市部と農村部の投票率の違いについて分析を行った。さらに、選挙の結果については、各党の得票数、得票率、獲得議席数と議席率などについて、地方区（または選挙区）と全国区（比例区）とに分けて、特に前々回との比較や地域別傾向を分析した。参議院選挙は、衆議院選挙に比べて、第一党への集中度が大きくなり、その結果として、参議院は衆議院に対して、「抑制と均衡」の機能を果たしてきたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The House of Councillors was established as the second House of the Japanese Diet in 1947. The project is to analyze each election of the House of Councillors since 1947. The analysis focuses on the political situations of each election, the results of opinion polls before each election, and election turnout. Then we go on to analyze the election results: how the parties get votes from different constituencies such as farmers or labors, and what kind of changes have been seen since the last election. The House of Councillors Election shows the more diffuse power concentration than the House of Representative. Therefore, the House of Councillors has functioned as a check-and-balance organization to the House of Representative in Post-War Japanese politics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			0
年度			0
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：選挙研究、参議院

1. 研究開始当初の背景

日本の国政選挙において衆議院の選挙の通時的な分析については私が執筆した『日本の総選挙』（東京大学出版会、2005年）があるが、参議院の通常選挙については、個々の選挙の分析については、衆議院選挙と同様に、存在しているが、通時的な分析は皆無であった。参議院は国会においては第二院として、とにかくその存在が軽視されてきた嫌いがあるが、初期の緑風会や現在のいわゆるねじれ現象に端的に見られるように、決して軽んずることができる存在ではない。そこで、私は、衆議院選挙に引き続いて、参議院についても通じてきた分析を行い、参議院選挙において民意がいかんにか反映し、それが、いかんにか変遷してきたのかを捉えようとした。

2. 研究の目的

戦前の帝国議会は、衆議院と貴族院から構成される二院制を採用していた。戦後になり、国民主権のもとで、貴族院にかわり、新たに参議院が創られ、国民の代表として衆議院と参議院から国会が運営されることとなった。本研究は、参議院ができてから現在に至るまでの参議院選挙を、投票率、党派別の得票率、さらには、地方区（選挙区）と全国区や比例区の投票の連関などに着目しながら、分析することによって、日本の戦後政治勢力の力の変遷とその理由を探ることを目的とする。そのことによって、衆議院選挙（総選挙）との比較における参議院選挙の特徴を抽出することも目指した。

3. 研究の方法

特に目新しい方法は用いていない。基本的には都道府県別の各種データを用い、それについて、比較的単純な統計解析を行った。また、新聞社等が選挙に際して実施している世論調査の結果も利用した。さらに、一部の県については選挙管理委員会におもむき、より詳細なデータを入手した。なお、参議院選挙の分析の大前提として、戦後の日本政治の流れについての理解は必須のものであり、それに関する文献を収集し、それらを読み込んだことは言うまでもない。以上の方法をもちいて、参議院選挙の通時的分析を著書の形にまとめることにした。

4. 研究成果

本研究の目的は、参議院通常選挙の通時的

分析を行い、それを著書の形で公刊することを最終的な目的としている。

(1) 個別選挙の分析

1947年以後2009年にいたるまでの個々の参議院通常選挙については、おおむね、以下のような点に着目して、分析を行った。その選挙が行われた政治的背景、立候補者（全国区・比例区と地方区・選挙区別に、党派別、出場回数別、新旧別の分析）、選挙の争点と世論調査における政党支持、投票率とその選挙区のD I D別の投票率、選挙結果については、全国区、地方区別の党派別得票数、得票率、獲得議席数、および、それらの前々回との（場合によっては、前回との）比較、全国区候補者の得票数分布とR Sの分布、地方区については定数別の各党の獲得議席数とその変化、接戦率の分析、そして、これらに関係する諸項目の分析を行い、最後に、新顔議員の出身について簡単な検討を行った。

各回選挙の分析は、これらの項目に着目して、1947年からの2009年の通常選挙について細かく分析を行った。それらについてここに記すことは煩雑になるので、省略せざるを得ない。いずれ成果が公刊されたときに見ていただくしかない。

(2) 参議院選挙一般の特徴について

図1 おもな党派の参議院の議席率の推移

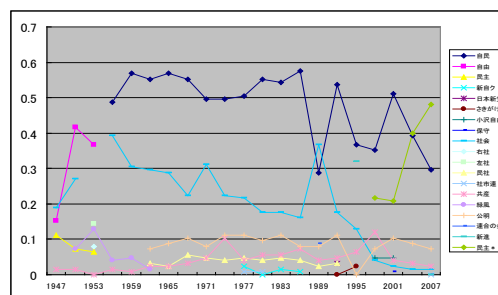


図1は、参議院に登場したおもな党派とその参議院における議席率とその推移を示したものである。これを見ると、これまでの参議院の歴史は3つの時期に分けるのが適当である。

第1の時期は、占領期から社会党の統一と

保守合同が行われるまでの、保守の分裂と、社会党と共産党の混乱の時期である。わが国の終戦直後の保守勢力は、自由党系と民主党系と国民協同党系の3者に分裂して始った。それが紆余曲折をへて、合同したのが1955年11月であった。革新勢力では社会党は戦前の無産政党を糾合したものであるが、しかし、その党の性格をめくり、階級政党の立場を堅持すべきか、あるいは、より広く国民政党として広範な国民の支持をもとめるべきかについて当初から分裂が見られた。社会党は、結局、右派社会党と左派社会党に分裂して、53年の選挙に臨むことになった。その社会党が再び統一を実現することができたのが1955年10月のことであった。さらに、共産党も1950年初めのコミンフォルムによる共産党の融和路線に対する批判から、党が分裂をして、武装闘争に走り、そして、国民の大方の支持を失った。その共産党がふたたび路線を転換したのが、1955年7月の第6回全国協議会であった。その意味で、戦後10年を経過した1955年はいわば「第二の戦後」とも言うべき決定的な意味を持った年である。

第2期は1955年から1993年までの比較的安定した時期である。この時期は自民党と社会党が中心に参議院が運営された。この時期の自民党の参議院での議席率は5割台で推移し、社会党は低落傾向を示しながら、おおむね自民党の半分の議席率を占め、さらにその半分以上を公明党が占め、さらにその半分以上を共産党と民社党が占めるという階層構造が定着していた時代である。

この時期は、参議院で与党である自民党が過半数を確保しているかどうかで、さらに3つの時期に分けられる。前期は56年から68年までの自民党が過半数を確保した時期である。中期は71年から77年までの自民党の

議席率が50パーセント前後の時期である。この時期には、71年に社会党が、そして、74年に共産党が突出して議席率を上げた選挙がある。後期は、80年以降で、自民党が再び過半数を確保した時期である。もっとも、89年選挙では自民党の議席率は3割程度まで落ち込み、逆に、社会党が4割近くまで議席率を上げている。有権者のボラティリティの高まりを示す事例である。

そして、第3期は、1993年に自民党政権が一旦崩れて非自民・非共産の細川政権ができてからである。すなわち、もっとも最近の政界再編を経たこの時期の自民党は、先行する時期のように参議院の議席の半分を確保することができなくなり、また、第二期の野党第一党であった社会党の凋落で特徴づけられる。そして、社会党に代わり、新進党や民主党が形成され、自民党と互角に対抗するようになる。すなわち、この時期の参議院においては優越的な地位を保持する政党がなくなったのである。

参議院選挙の終戦直後からの推移を衆議院選挙と比較すると（衆議院選挙については拙著『日本の総選挙』を参照）、トレンドとしては衆参両院とも類似した傾向を見せているが、参議院選挙では、衆議院選挙に比べて第一党の力が強くないということが言える。緑風会や無所属議員が多かった初期を始め、1980年代以後は、いわゆるねじれ国会に端的に示されるように、それが顕著に見られ、参議院では絶対多数をとった政党がなくなる。このことは、参議院が衆議院に対して、相対的に広い選挙区を基盤とするために民意をより正確に反映することを示しているとともに、参議院が衆議院に対して「抑制と均衡」を図るという、立法者の意思がある程度実現していることを意味するといえよう。

参議院議員の任期は6年で、3年ごとにその半数を改選するのがルールとなっている。したがって、参議院議員は実際には二つのグループから構成されていると見るのが妥当であるが、従来は、無批判的に、参議院選挙の比較には前回、すなわち3年前の選挙との比較がなされてきたが、むしろ6年前の選挙との比較をまず行うのが正当な分析となる。本研究は、以上のような認識の下に、各回の参議院選挙を、前々回との比較を中心に行ったところに、特色のひとつがある。ここでも個々の分析を記すことが煩雑になるので、省略に従わざるを得ないが、図2と図3は、参議院議員を二つのグループに分け、そのおのおのについて、政党の消長を図示したものである。

図2 A組の各党議席率の推移。

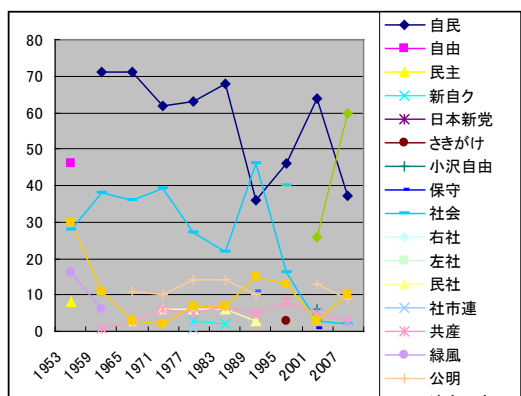
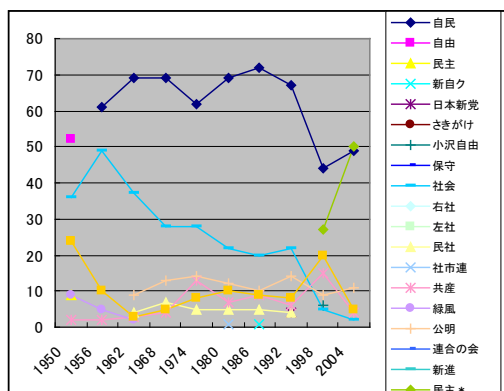


図3 B組の各党議席率の推移。



ここでA組とは1947年選挙から6年ごとに通常選挙を受けるグループであり、B組は、1950年から6年ごとに選挙の洗礼を受けるグループを指している。

まず、A組の各党の議席率の移り変わりを見ると、第一党の自民党は1983年までは比較的安定しているが、それ以後は非常に激しく変動している。第二党の社会党も1971年ごろまでは40議席弱の議席を確保しているが、それ以後は、1989年の突出を唯一の例外として急速に党勢が衰えている。B組を見ると、A組とはやや異なった構図となっている。自民党は1992年まで比較的安定して多数して続け、1998年と2004年に大幅に議席を減らしている。反対に、社会党は1956年に50議席を獲得してからはあとは、低落を続けるだけの姿が浮かび上がってくる。このようにA組とB組とはそれぞれの政党の消長の形が異なっているのである。

A組とB組の異なった推移を考えるひとつのポイントは、A組の選挙にはいわゆる亥年の選挙が隔回ごとに発生する点である(1959年、1971年、1983年、1994年、2006年)。亥年には参議院選挙の直前に統一地方選挙が実施される。地方議員は参議院選挙では候補者の手足となって得票獲得運動を行うのであるが、それは、ひいては自分の選挙運動ともなる。しかし、統一地方選挙で当選したり、落選したりした地方議員は、その直後の参議院選挙の選挙運動には力が入らないために、亥年の参議院選挙では、一般に、投票率や自民党の集票率がさがる。A組において第一党の自民党が相対的に振るわない理由のひとつとしてはこの亥年現象を考察することができる。

以上のように、参議院選挙の全体的な傾向と各回ごとの分析を行った原稿はすでに完

成し、現在は、それを公刊すべき書店を探している段階である。公刊の上は、今回の成果の全貌をみることができることになるろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 田中善一郎、二大政党と小選挙区制の時代なのか、Voters、査読なし、11号(2012年5月)、5-6ページ。
- ② 田中善一郎、衆院選挙制度をどう変えるか、公明、査読なし、76号(2012年4月)、16-21ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 善一郎 (TANAKA ZENICHIROU)
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・
名誉教授
研究者番号：30009823

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし